
ひみつ、ひみつ

ayu

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ひみつ、ひみつ

【Nコード】

N1197T

【作者名】

ayu

【あらすじ】

身分違いの恋をした二人の、秘密の結婚式のお話。

（前書き）

楽しんで頂ければ幸いです。

0

私たちは、ひとつの秘密を持ちました。
誰も知らない、私たちだけの秘密。

1

「内緒ですよ。誰にも、秘密」

「うん。ひみつ、ひみつ」

お互いの唇を、お互いの人差し指で塞いで、ひっそり、こっそり。
誰にも気づかれてはいけない、秘密の儀式。

3

「健やかなる時も、病める時も、生涯、私を愛し続けることを
誓いますか？」

彼は、誓いますと微笑んだ。

「健やかなる時も、病める時も、生涯、僕を愛し続けることを
誓いますか？」

私も微笑み、愛しい彼に永遠を誓う。

深夜、忍び込んだ教会の中での、小さな小さな結婚式。白いカーテンで作った即席のヴェール。ティアラがないのは可哀想だから、と頭には彼の作った花冠。それから小さな雑貨屋で買った、おもちゃの指輪。祝う人のいない、結婚式。

「お嬢様。今、何を思ってるのですか？」

「地獄にだつてついて行くから、別れさせようたつてそうはいかないわよ、つて。神さまに宣戦布告。今を持って、貴方は使用人ではなく私の旦那様になったのよ」

だからどうか、名前で呼んで。そう言つて、にやりと笑つて見せる。子爵の娘と、使用人の息子。互いに抱くこの想いは、大人が言うには『子どものお遊び』。

「二人の時には、敬語も不要よ」

「……うん、分かつた」

アリアは美しいね。彼はそう呟いて、私の額に口付をした。きらきらの、金の髪。彼の美しい髪が窓から差し込む月に輝いていて、まるで妖精の粉を振りかけたようだ。

きらきら、きらきら。ああ、なんて綺麗。

「アリア。君も、僕の名を呼んで」

私の頬をそつと撫でながら、彼は呟いた。静かで優しいテノール。心根も、その容姿も、その声も。彼は全てが美しい。私は頬を撫でる手に自らの手を添え、そつと頬ずりした。

「……レオン、愛してる」

呟いて、指輪をちようだい、と微笑んだ。

「うん」

おもちゃの指輪。

何の飾りもない銀色の輪が、私の指に填められた。

ルビーにサファイア、ダイヤモンドの指輪だつて持っているけど、こんなにも幸せな指輪を持つのははじめてで、気付けば口元がほころんでいた。

「……ちゃんと、継ぎ目のないものを選んだからね」

「うん、……ありがと」

指輪は、契約の証だ。

永遠に途切れる事のない愛を誓つ、縛るもの。互いに、互いを拘束する。ああ、なんて甘い、拘束具。私も彼の指にそろいの指輪を填めた。もちろん、左手の薬指。

「……もう一度、誓って？ 私に、永遠を」

お願いだからと呟けば、彼は優しく微笑んだ。

「……僕の恋人、愛しい人。貴方の永遠を、貴方との永遠を、ここに誓いましょう。結婚のとき、教会の神父様は『死が二人を分かつまで』と言うけれど、僕は死してもなお続く本当の永遠を、ここに誓うよ」

君も、誓って？

その言葉に、泣きそうになる。誓っても、私はすぐにそれを破る事になってしまうのに。誓うことのできる永遠なんて、持ち合わせなどないのに。

「……私は、私は永遠に、貴方を愛し続けることを誓います。これから先何があるうと、この身が他の誰かのものになる事があるうと、この心だけは貴方以外の誰にも渡す事はないと、貴方への想いをこの想いの永遠を、貴方に誓います」

ほろほると、涙がこぼれた。

明日、私は結婚する。父様の決めた、知らない人。王族の血を持つ高貴な方だと言う。だけど私の愛しい人は使用人で、身分なんでもないも同然で、爵位なんかとは縁もなくて、相手と張り合う事の出来る要素はひとつだって持ってなくて。ああ、なんて不毛な恋をしたのだろうと、私はほろりほろりと涙を零す。

彼はこんなに優しいのに、こんなに美しいのに、どこまでも穏やかで、柔らかくて、幸せで、私は他の誰よりも彼と共にいる事を望んでいたのに。

「レオン……」

「アリア……、どうか、泣かないで。これで僕は、君の永遠を貰う事が出来たんだから。本当の婚約者には渡る事のない永遠を、君は誓ってくれた。それで、僕は十分だ。ね？」

伝う涙を拭うように、彼は私の頬に、目元に口付をした。そして、困ったように眉尻を下げる。

「ねえ、アリア。誓いの口付けの時は笑っていて欲しいんだけど」

うれし泣きなら許すけどさ、なんて。気障な事を言ってレオンは笑った。その言葉に、私も思わず笑ってしまう。

「アリア、ほら。誓いの口付けを」

「……うん。神さまなんか信じちゃいないけど、貴方に、誓うわ」
触れる唇の柔らかさに目を閉じて、私たちは誓った。ここに、叶う事のない永遠を。

2

「健やかなる時も、病める時も、生涯、互いに愛し続けることを誓いますか？」

神父様の言葉に形ばかりの返事をして、私は顔中に作り物の笑顔を張り付けた。

鳴り響く祝福の鐘、きらきらのドレスに、長いヴェール、ずらりと祝う人の並ぶ大きな教会。大きなブーケを手に、私は知らない人と結婚した。

指にはめられた指輪には大きな宝石が嵌め込まれていて、なんだかやけに重たかった。豪華な、デザインを重視したのであるうその指輪には小さな継ぎ目が見えていて、こんな指輪じゃ永遠なんて誓えないわと私は心の中で微笑んだ。

「喜んでもらえて嬉しいよ」

何を勘違いしたのか、的外れな言葉。ああ、なんだか酷く滑稽で、可笑しくて、私はくすくすと声を漏らしてしまった。貴方に捧ぐ事の出来る永遠なんて持っていないのよ。そう言う事が出来れば一番いいんだけど、そうはいかない。

「どうか、私の事を幸せにしてくださいね」

そう言つて、誓いの口付けに応じた。

私に触れず、近づかず、必要最低限以上に干渉せず、放っておいてください。心の中で訳した言葉は外には出さず、私は微笑みの仮面を被ったまま婚約者の腕に自分の腕をからめた。

本当に愛しい人は、ここにはいない。

3

「……アリア、その指輪は？」

王族の血を引く旦那様は、優しい声でそう言った。目線の先には結婚指輪の下に詰められた、細い銀色。

それに、私は微笑んで答えた。

「以前、大切な人に頂いたものよ。少しサイズが大きいから、結婚指輪の下に付けたの」

これなら、落とすことはないでしょう？

言い添えてにつこり笑って見せれば、彼もそうかと微笑んだ。

「もしかしてその『大切な人』と言うのは、君の元恋人だったりするのかな？」

「さあ、どうかしら」

大切な人は、私の愛しい旦那様。誰も知られてはいけない、誰にも気付かれてはいけない、たったひとり。私の永遠を誓った、誓い合った、私の唯一。

私は自分の唇に人差し指を当てて微笑む。

私と彼の、内緒の誓い。誰も知らない、私たちだけの秘密。私は静かに呟いた。

ひみつ、ひみつ。

END

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1197t/>

ひみつ、ひみつ

2011年5月31日12時07分発行